

フランスにおける人狼伝承についての考察

篠田 知和基

フランスの伝説で名高いのはガルガンチュアのそれとメリュジーヌのそれである。ガルガンチュアは早くラブレールによって文学化されたことは周知のとおりだが、各地に、日本のダイダラボッチのような巨人伝説が、ガルガンチュア異伝としてひろまっている。また一方、ラブレールが文学化して記録したものはガルガンチュア伝説の標準的かつ純正なものであったとは限らない¹⁾。ガルガンチュアとパンタグリユエルのいさおしのまわりには、さまざまな民間伝承が寄せ集められている。その意味で、ラブレールの『ガルガンチュア』は一種の伝説集ともみなされる。ただし、ラブレールの文名が高まったので、後世の人々は、彼の『ガルガンチュア』をもって唯一のガルガンチュア伝承とし、そこにガルガンチュアの名のもとに寄せ集められたものをも一種ガルガンチュア・サイクルのように誤認したし、そこに記録されなかったものは偽典扱いをされ、それら民間の純粋な口承にもとづいてガルガンチュア像の再建をはかるものはずいぶん出なかった。

メリュジーヌは、ポワトゥ地方のリュジニャン (Lusignan) 家の始祖伝説のはずながら、かなり広い地域に同名のままひろまっている。妖精伝説の代表であり、泉のほとりにあらわれ、罪、または苦しみを背負った騎士と結ばれるが、金曜または土曜に姿を見てはならないという禁忌を持ち、禁忌を破られると龍となって飛び去るが、遺児への哺乳のために異形のまま夜な夜な戻ってくるか、または、子孫の守護霊となって、危難がふりかかるたびに警告をしに戻ってくる²⁾。わが国の豊玉姫説話との類似のみならず、ドイツでは白鳥の騎士ローエン格林につながるのだといった研究もあって³⁾、一地方伝説ではなく、普遍的な異類婚や、変身や、妖精譚を集合する母胎となっていると思われる。これはジャン・ダーラス (Jehan d'Arras) によってまとめられたものが古い⁴⁾が、ラブレールほどの成功は博さなかったから、後代の文学者が幾度も、そのイメージを文学に利用しても⁵⁾、伝説としての再構築はなされなかった。

フランスでもうひとつ名高い伝説的存在に魔法使メルランがいるが、これはロベール・ド・ボロン (Robert de Boron) の記載のほか⁶⁾に、クレチャンによっても利用され、さらに英国系のアーサー王伝説で豊富に潤色されてゆく一方、フランスではキネが膨大な同名の小説を書き (Edgar Quinet: Merlin), アポリネールが名高いパロディ (L'enchanteur pourrissant) を作っているので、使い古された素材という印象があるものの、その真の伝説的相貌はあきらかではない。日本で言えば役の行者のような術使いであるとともに、その名に言及することをばかられるような根の国の神でもあろう。

巨人、妖精、魔法使い、そのそれぞれの代表的な存在が、フランス文学の中では、あまりに有名な脚色があるために、あるいはあまりに人口に膾炙しているがために、あるいは多種多様な翻案が多すぎるがために、かえってその実態が茫漠としている。

まず国民的な神話が長い時間をかけて形成され、記紀のような形で確立され、それと呼応する形で地方的伝承が風土記として、民衆の説話や、宗教説話が今昔物語のような形で集められて、それらがその後の文学的物語の歴史の母胎となるというようなことが、少なくともフランスでは見られない。

にもかかわらず、人々の記憶には共通の伝承として、ドンタンヴィルらの言い方をかりれば「フランス神話」とでも言うべきものを形成する話柄がいきづいている。

近代文学の鑑賞においても、周知の口碑として陰に陽に引用され、喚起され、変奏を加えられるそれらの伝承が、依拠すべき書承のテキストを欠くために、口承伝統の外にあるものにとってはその文化的基盤の欠如から、作品の理解が行き届かないおそれがある。

昔話なら十九世紀から採集の努力が重ねられ、グリムのような広濶な集成はいまだないものの、コスカン(Cosquin)などの数種類の集成をもってすれば、アアルネ・トンプソンの国際話型表に分類された全話型のほぼ九割のフランス語による伝承を知ることができる。

しかし伝説についてはそうはいかない。わが国では昔話集成・大成について、伝説大系もできあがったが、フランスでは各地の民間伝承としての伝説や妖怪譚・怪異譚・驚異譚を集成する努力は皆無であると言っていい。

いな、これはフランスだけではない。昔話、それもA T 300から700番台までの本格魔法昔話については採集と分類がなされたが、伝説については日本以外のどこの国でもまったく手つかずの状態である。

伝説といっても英雄・始祖伝説ならば吟遊詩人によっても公権力によっても早くから書承化されている。しかし一旦そこで脱落した敗者や弱者や異端者の物語は野に下り地に潜って、怪異の相を強めながら、異伝が異伝を生んでゆく。

宗教説話についてもその間の事情に径庭はない。ウォラギーネの『黄金伝説』はすべてを網羅したわけではないし、民衆の聖者伝は⁷⁾必ずしも公権力や公教会によって承認されたわけではない。ここには地方的な、そして多分に異教的・土着宗教的な、説話以前の断片的伝説が数多く残されていて、石像の騎士や、呪われた狩人、破戒僧のミサなどが、周知の口伝として文学に説明ぬきで引用される。騎士伝説でも、宗教性の強いものほど、公権力による年代記化の作用を免れる傾向が大きいことは注目に価する。エモンの馬とか悪魔のロベールとかがそれで、神仙伝説や始祖伝説のばあいとも同じく、宗教伝説でも、公認の、かつ書承化の早い説話と、土俗の、口承期間の長い伝説(これをあえて民間伝説と名づけたいが)とが区別されるべきである。

研究者は一般に伝説を池や山のなりたちや由来をのべたり、土地の怪異を語る自然伝説、寺

社、教会などの縁起や奇瑞を語る教会伝説、歴史上の人物にまつわる歴史伝説などに分けるが、由来譚と、怪異を語る伝説とは、同じ民間の非公認の物語でも、神話と怪談ほどのへだたりがあり、共同体の公準を求める方向と、それから逸脱する異常現象への傾斜とに根本的な方向のちがいを⁸⁾見るべきであろう。そして、公式化されない物語のほうに自然の大きいなる力への畏怖の感情が見られるのは当然でもあろうが、かかる、民間の怪異、それも個人的、地方的怪異をもの⁹⁾がたる口づたえの物語に、十九世紀の文学は新たな想像の源を汲もうとしたのである。

メリメの『煉獄の魂』、『ロキス』、バルザックの『不老長寿の妙薬』、『淫夢魔』などはその代表的な、顕著な例であり、より原資料に近いものとしてはネルヴァルの『ヴァロフの民謡と伝説』やスーヴェストルの『ブルターニュの炉端』、そしてサンドの『田園伝説集』などがあ¹⁰⁾った。

中でもサンドの『田園伝説集』は、セビヨ (Sébillot) が『フランス民俗学』でたびたび典拠としているように、原資料としても信頼度が高い上に、なにより、サンドの、他の、より小説的な作品のテーマやモチーフとして用いられているものが生みの形で集められている点に、伝説から文学への生成過程を見ることができてはなはだ興味深い。

これは、サンドの息子のモーリスがベリー地方の各地で聞きあつめてきた話を枕にして、似た話を、サンド自身が各地で聞いた話の中から拾い集め、あるいは知人たちに新たに語らせて記録するという形で作られた聞き書き集、逸話集だが「夜の洗濯女」、「馬鹿石」など、ユニークで面白い話にまじって、狼狂に関する話がいくつか出てくるのが目を引く。

まさに、ヨーロッパ、そしてなかんずくフランスの文学の中で瀕繁に言及され、モチーフとして利用されながらその正体のさだかでないものがメリュジーヌやメルラン以上に、この狼狂なのだ。騎士伝説や宗教説話なら、いかに非公式の異端臭の強いものでも、話型として登録されて何らかの形で物語化され、首尾結構を整えてゆく。それに対して狼狂は症例や判例として記録はされても、民間伝承の中では物語化されることがなかったから、いずれも断片的な話で、多様であいまいなままとどまっている。¹²⁾

もちろん、早くマリ・ド・フランスに「ビスクラヴレ」のレ (短詩) があることはある。しかし、これは女房を寝とられた男の復讐譚でもあって、狼への変身のモチーフは付随的であるとも考えられる。¹³⁾ いずれにしても、なぜ主人公が狼に変身するようになったのかはあかされ¹⁴⁾ない。男が狼になっているあいだに、女房がその衣類を奪ってしまって人間に戻れないようにし、他の男と一緒にいる。それを男が復讐をするというのだから、たとえば、男を謀殺して女が情人と一緒にいるといった話と大筋は変わらない。男が狼になるという秘密を聞きだす話は、聞いてはいけ¹⁵⁾ない秘密を聞くという「白鳥の騎士」のモチーフであり、週のうち三日間、亭主が姿を消すので不審に思って、秘密を聞くという発端はメリュジーヌのモチーフである。したがってここには、人狼が衣類を奪われると人間に戻れないというモチーフしか狼狂のそれとしてはないことになるが、それも天人女房、白鳥乙女の話のモチーフであり、すべて、広く、異類婚の変身と禁忌のモ

チーフである。¹⁵⁾

〈狼狂〉のより文学的な展開としては、十九世紀になってデュマの『狼使い』(Le Meneur de loups, 1857)、エルクマン＝シャトリアン(Erckmann-Chatrian)の『狼のフーゴ』(Hugues le loup, 1862)、そしてはるかに時代を下って、ジャン・レー(Jean Ray)の『マルペルチュイ』があるが、そこで描かれたものはそれぞれ別個のものである。これにあえて加えれば、自ら狼狂と称したボレルの「狼狂ジャンパヴェール(Champavert, le lycanthrope)」があるが、これはヘッセの『荒野の狼』(Steppenwolf)と同じく、現実の狼とはまったく関りが無い話。せいぜいが狼のように荒々しい孤独な魂を持ったものといった意味で、もっともボレルにとっては「狼狂」Lycanthropie とはその程度の間人嫌い(Misanthropie)の野人をさす語でしかなかったもしれない。¹⁶⁾

デュマのばあいは、それとは異っている。彼は、ヴィレール・コトレの田舎で育った子供時代に森番の男から聞いた話として、「チボーの狼」の話を語る。チボーは、悪魔と契約をして、狼使い、Meneur de loups になったとされる伝説の人物である。

主人公は森の木靴づくりだが、ある時、領主に非道な扱いを受け、復讐を誓う。そこへ大狼があらわれ、契約を申し出る。年に一日だけ狼の姿になれば、あとはどんな願いごとでもかなう、狼たちも言うことを聞く。彼は契約を受け入れ、狼たちを使って領主階級に戦いを挑む。しかし一年目、狼の姿になる日が回ってきて、領主たちの猟犬に追われ、あわや八つ裂きかというところで、かつて愛した少女の愛の力で救われる。

悪魔と契約をすると狼たちを意のままに扱える、あるいは、悪魔に身売りした証拠に、狼たちがやつてきて親しくするといった言い伝えは広くある。それを一般に「狼使い(Meneur de loups)」¹⁷⁾と言う。

エルクマン＝シャトリアンのばあいは、より病理学的で、周期的に狼憑きの症状を呈する人物の病因をさぐる物語を描いている。症状としては、降誕祭近くになると、原因不明のてんかん症状を示し、意識不明に陥るが、病状の昂進時に夢遊病状態で起きだして、四つんばいになり、狼の吠え声を発する。病状は同じように狼の吠え声をまねる老婆があたりをうろつきはじめる時期と一致する。病人は老婆とともに、夢遊状態で模擬殺人儀礼を行い、仮想の屍体を二人でかついで夜の野原へ出て、谷底へはおりなげる。彼らの原記憶の中に狼のイメージとともに刻印された殺人の罪の宿命、あるいは象徴が、その病因にある。

夢遊状態で狼のまねをし、野原をかけ回り、狂暴な行為や、模擬殺人を行うというのは、古来、精神病としての lycanthropie として記載されてきた症状であり、民間俗信でも loup-garou は、夜中に狼のように野原を走って、昼間は少しも覚えていないと言う。

ジャン・レーの記したものは、不犯の誓いを破った司祭の裔が七代の間、毎年きまった期間(二月二日聖母おきよめの日に至る蠟燭祭の週)、狼になって暴れ回る。しかし、狼の毛皮を火

に投ずることによって呪いを解く。

これらは文学化された伝承というより、民間伝承に題材をとった作品だが、文学的脚色度の少ない再話としてはカナダの作家ルイ・フレシェット (L. Fréchette) の語る「人狼 (Loup-garou)」がある。長年ミサにいかなかったものが降誕祭の夜、狼に変わってしまうが、眉間に傷を受けることによって呪縛を解かれ人間に戻るというもので、カナダやフランスの各地で語られている近代の人狼伝説の集約と考えてよい。ただし人狼伝説はそれだけではない。現在もっとも純粋な形でフランス系の民間伝承の残っているカナダで伝わっているものを整理すると、症状としては、夜中に野原を走り回る、生肉を好むといったもの (これを *courir le garou* と言う) が多く、その原因としては教会からの破門が多い。あるとき教区で謎の犯罪が行われ、目撃者は名乗り出るようにとミサの説教で言われるが、だれも名乗り出ない。そこで司祭が、犯罪を知りながら黙っていたものは教会から追放されるであろうと言う。その宣告の結果、隠れた目撃者が夜になると上着を脱いで、夜明けまで野原を走り回らなければならなくなる。四つ辻で、この男の脱いだ上着を拾ったものは、やはり同じく、体力のつづく限り走りつづけなければならない。¹⁹⁾

現象としては〈狼のロンド〉があり、夜間、森の中、あるいは川のほとりで狼たちが焚火のまわりで踊っている。鉄砲で撃ってもあたらない。ただし聖別した弾で撃てば当たる。これはセニョールの『ラングドック民俗志』によると「狼使い (Meneur de loups)」が焚火をし、その回りに手下の狼たちが集っている場面に相当する。サバトの伝承や、あるいはカナダに多い「地獄の焚火、冷たい火」の伝承にも接続しているが、「狼使い」本来の伝承が後退して、あまり聞かれなくなっているカナダでのその残存形態であろうと思われる。²⁰⁾

さらに一般的な「人狼」についての言い伝えでは、狼に出会って傷を負わせたあとで、村へ帰ってみると老婆が同じ傷で寝ていたというものが、とくに物語を形成せずに、よく語られる。(D7 2.1.1)。しかし、「狼狂」や「人狼」がかなり日常生活に密着しているカナダの農村でも、この種の話は日常世界からかなりかけ離れた神話的話柄として受けとられている。フランスでも、どこそこの領主の奥方が夜な夜な狼になって森をさまよい、子供たちを貪り食っていたが、あるとき村人に撃たれて、翌朝、ベッドの中で血まみれになって死んでいたのを発見されたといった話は、すでに文学に近い「物語」として語られ、その断片ないし素材としての、傷による怪物の正体の判明のモチーフのみがひろまっている。日本では「狼梯子」でこのモチーフが使われる。²¹⁾

これはカナダだけではなく、中南米などでもかなり広まっている言い方で (lobis-homen, lupo-mannaro)、語原的に矛盾するようだが、狼以外の動物や、あるいは品物に人間が化けるばあい、あるいは、それらになにかの霊がとり憑くばあい、さらには、それらが「化ける」ばあいに *loup-garou* という言い方がされる。ルミュー『オンタリオ民話集』で *loup-garou* と題される話、(採集者が *loup-garou* についての話を求めて、それに対して語られたもの) の中に、夜道で迷い羊をみつけて、背負って帰ったら、途中で羊が急に重たくなったとか、口を利きだし

たなどというものや、あるいは、やはり夜道で毛皮のマフラーを拾ったら、それが動きだしたといったものがある。毛皮は、狼狂本来の伝説でも、狼の毛皮を着ると狼になるといった使われ方をするから、必ずしも驚くにはあたらないが、俗信としては、人が他のものに姿を変えることと、動物などに霊が憑くことのふたつが、広く loup-garou として認識されていたらしい。サマーズも werewolf には weresheep, were-ox などがあると言っているし (op.cit, ix), ボーダンらはキルケーの魔術と、聖書のネブカドネザル王が牛になった話を狼狂の二大起源にしている。

また古代医学では lykanthropy がすなわち憑依性分裂病の典型で、今日でも広く獣憑き (zo-anthropy) として、狐、蛇、猫、などのばあいを含めて認識されている。²⁴⁾

すなわち「狼狂」と言っても、病理学的には憑依、人格変換をさし、伝説では人獣や変身一般を指す一方、「狼」に直接かかわる驚異や想像をも指す。キリスト教世界では狼が悪魔の獣として認識され、教会秩序からの逸脱、背反の罰として、「狼狂」症状が与えられる。しかし、カナダの農村地帯では、フランス語に相当の歪みが見られ、禁忌語は、定義づけを避けられるあまりに、ますます意味を変えてゆく傾向があるから、loup-garou の話として、「鬼火、人魂」に出会った話が語られることもある。となると「狼狂」、「人狼」のイメージはますます茫漠としてくる。

その点、本来のフランス語が語られる文化圏で、採集者にも言葉に対する感覚があり、かつ、時代的にもまだ純粋な伝承が保たれていたころのサンドの採集に戻って「狼狂」を考えてみれば、問題も多少は明確になるかもしれない。

サンドはここで、狼にかかわる伝承として「狼使い」、「Lupeux」、「Lubins ou Lupins」をあげている。そのうち「狼使い」はセビヨも引用しているように、かなり典型的な伝承と思われる。ただし話としては二種類あり、ひとつは狼の群れを率いている男を目撃した人の話、もうひとつは音楽家に関係した話で、これについてはクロード・セニョールも「悪魔は狼の形をかりて、氏神祭や結婚式で遅くなった楽師を脅すものとされている」(『ラングドック民俗志』266頁)と言っているように、狼と音楽師は関りが深い。²⁵⁾

サンドの報告しているのは、妙なる音楽を手に入れるために悪魔と契約をした楽師に狼の群れがつきまとう話で、ことのおこりは、夜遅く荒野を通過して家路を急いでいた楽師の目の前をみごとな風笛が妙なる曲を奏でながら漂ってゆく。風笛はつかまえようとするとするりと身をかかわす。あきらめようとするところからかうように近くに下りてきて、ますます美しい音楽を奏でる。楽師はその日以来、その荒野の音楽にとりつかれてしまう。そして夜毎、荒野へ出ては、風の音と腕を競うようになる。風笛はその後姿を消したらしく、そのかわりに狼が、そんな彼を遠巻きにじっと見守っている。そもそもはじめの風笛が狼のいたずらではないのかと思われる。日本の狐とちがってフランスの狼は化けないと思われているが、ここはただの狼ではない。悪魔が楽師を誘惑するために狼になってあらわれたのだ。loup-garou のばあいは、たとえばミサを怠ったもの

が狼に変身する。ないしは狼と同じ行動をとられる。しかし meneur de loups は、デュマの話にもあるように、はじめは狼があらわれて役柄の交替を申し出る。そして、その日一日狼になりかわってくれるならどんな願いもかなうようにしてやろうと言う。さらにしきたりどおりの羊皮紙の契約書まで、どこからかひっぱり出してくる。この巨大な黒狼は悪魔そのものなのだ。はじめに、犬たちに追われて窮地に陥っているようによそおって、恐怖と同時に同情心をさそったのも悪魔の奸計である。そして悪魔との契約の結果、狼たちが意のままになるというのは付随的なことだ。それは願いをひとつ口にすると髪の色が一筋ずつ、火のような色に変わってゆくことと同じで、悪魔の獣たちである狼は、主人公が悪魔に帰順したのを見て同類感を持って従ってくるだけのことだ。

サンドの話でも、楽師を誘惑し、迷わせたのは悪魔であると断定されるが、悪魔そのものは姿を見せず、形の見えるものとしては風笛と狼しかない。そして、その風笛と狼は交互に形を変えらるものように思われる。楽師はふしぎな風笛を追いかけているつもりが実は狼たちの群れにとりまかれて、風の音にたぶらかされていただけなのだ。しかし、彼がその風の音をまねて自らの楽器を奏でると狼たちがうっとり聞きほれる。

そうやって狼を意のままに操ることができるようになった彼が、その能力を使って悪事を働いたかと言うと、そこまでは行かず、彼はただすばらしい音楽を自分のものにしようとして骨を折っていただけである。

荒野に漂う超自然の怪を追って秘曲を手に入れるモチーフは、サンドにおいては『笛師の群れ』にみごとに小説化されるが、これは民話でも幻想文学でも瀕繁に語られるモチーフである。そしてそれ以上にサンドの描いたこの孤独な芸術家の肖像は、芸術の鬼にとりつかれたものが、人の世の交りを絶って、荒野に（これはアレゴリーでもよいが）さすらいつつ、目を血走らせ、髪ふり乱し、半ば狂って、不可視なるものを追求める、まさにボレル的「狼狂」のそれであると言ってもいいかもしれない。

それに対して、Lubins と Lupins と名づけられた妖怪のほうは、いく分、採集した伝承が不十分だったような印象がある。相手にごちそうを約束して逃れたあと、狼(?)が家のまわりをうろついて離れないというのは、狼使いの伝承で、森の中で狼使いに会った旅人が、あとでガレット(パンケーキ)をやるという約束で狼に送ってもらいながら、約束を果たさないでいると、狼にとりつかれて悲惨な最期をとげるとい²⁶⁾う話を思いださせる。

しかし、サンドの言う lubin は、墓場の塀にもたれて月光浴をしている妖怪で、モーリス・サンドの挿絵では狼の姿をしているが、サンド自身は、「黒犬か狼に似た妖怪」としか言っていない。そしてこれが何をするかと言うと、ただ「月光浴」をしているだけで、ふつうは人が近くとさっと逃げだす。ただし中には墓地の中へ入って死体をかじるものもいるということで、「そのばあいには狼狂や人狼に属し、lupins と呼ばれるべきであろう。それに対し lubins のほ

うは名前だけではなく性質も温和で、何の害も与えない」と言う。

その「何の害も与えない」はずの妖怪ないし精霊が、その前を通った仕立屋の口笛に誘いだされて塀を離れてついてくるというのは、前述の荒野の楽師のばあいに近い話でもあり、ただの壁にはりついている家霊的な存在とは別物であるような印象を受ける。

壁によりかかって立ち尽す妖怪はノデイエの『スマラ』では、ラリッサの城壁に立ち尽す浮かばれぬ亡霊たちを思わせる。サンドの伝える妖怪も墓場の塀によりかかって夜どおし立っていないなければならないのは、墓地の休らぎを禁じられたものの定めである。生前の悪行によってキリスト教の墓地に入ることを許されなかったものが狼の姿になって、墓地の塀によりかかって夜をすごすのなら、これは死後の狼狂だろう。彼らは人が近づくと素早く逃げるのだが、そのときに「ロベールは死んだ、ロベールは死んだ」と叫ぶと言う。「悪魔のロベール」の伝承にあるように、このありふれた名前は残虐非道な不徳義漢の代名詞でもある。悪魔のロベールは死んだけれど、生前の悪行のために永遠の安らぎを禁じられているという解釈もできるだろう。いずれにしてもこれは生きている人間の変じた人狼ではない。

それは *lupeux* も同じである。名前からすればこれも *lupin* も狼に関係がありそうだし、文中でも「*lupeux* は *lupin* や *lubin* など他のどんな *loup-garou* の変種とも混同してはならない」と、*loup-garou* の一種である点は肯定されているのだが、*lupin* 同様、生きた人間の変じた妖怪であるより、浮かばれぬ亡霊か、目に見えない精霊のようである。いや、まさにこれは目に見えない精霊で、荒野を行くときに声だけ聞こえ、その声のあとをつけてゆくと沼にはまりこんで、いまわのきわに、妖怪の正体がようやく見える。サンドの記述ではどうやらいたずらかさきぎのようだが、語り出しはとある旅人の連れていた犬が殺されてから幽霊となって殺害者につきまとったというもので、要するに幽霊である。

サンドはこの本でもうひとつ、「大化物 (*grand' bête*)」と題して、やはり「人狼」的な妖怪におびえる村人の姿を描いているが、そこでも妖怪自体はついにあらわれない。

結局サンドはマリ・ド・フランスの語ったような本格的狼狂譚は語らなかつたことになる。しかし、そのような「本格狼狂譚」がはたしてあるのだろうか。猟奇的でロマネスクな変身譚は神話や文学の世界にしかなく、民間伝承のそれは、名称の混乱とともに、語られる事実もきわめて日常卑近な断片的些事に近づいてきているのではないだろうか。

カナダで人狼の話と言うと人魂と混同したり、動物が口をきく怪異のこととされたりすることはすでに述べた。フランスでもニヴェルネ地方の伝承集では、あきらかな「人狼」現象が「狼使い」の名のもとに語られる²⁷⁾。羊飼いが毎日弁当を奪いにくる狼を撃ったところが、それが主人であったという話で、弾を司祭に聖別してもらうモチーフ、家へ帰ると主人が怪我をして寝ているモチーフなど、いずれも人狼譚に属するが、ひとつはこの狼が弁当を食う以外の害をなさないことと、*loup-garou* という言い方がされない点に、伝承における荒唐無稽な神話から日常的現実

の寓話への移行が見られる。

民間伝承集でも、文学的再話性の強いものではマリ・ド・フランス型の話が現われるが、こんにちもっとも民俗文化に忠実な形で集められたRCFシリーズでは、上記の巻のほか、ガスコーニュ編上巻でも、今度は loup-garou のタイトルで、まるで人狼らしくない話が収められている。日本で言えば狼の化ける話のようなもので、loup-garou が橋に化けていたと言うのだが、それがもとは人間であったとは語られない。

プロヴァンス編上巻では loup-garou のタイトルで、長い黒衣と仮面をつけて、吠声をあげて走り回る人間のことが語られる。変身はまったく存在しない²⁸⁾。

ポワトゥ編上巻では、変身があるが、これはカナダでもよく見られる羊のケースである。夜中に野中の辻で二頭の羊が後足で立って跳びはねている。それをつかまえて背中にかついで行くと羊が口をききだす。そこで道ばたにはおりにげて帰ってくるが、翌日、そのあたりで、男がびっこを引いて歩いている。すなわち変身はかならずしもたしかではないが、羊が異様な行動をして、かつ口を利くことにおいて、loup-garou と名づけられている。羊が群れから離れて迷い出したり、異常な行動を取るときに、正常でないとか、狂ったという意味で loup-garou というほどの言い方である。狼がいなくなってから、とくにその種の用法が広まったとも考えられる。loup-garou を galipote, ganipote, bigourne などと呼ぶときにはなおさらであろう。RCFのオーニス/サントンジュ編ではビグルヌの話がのっているが、「ビグルヌとは悪魔と契約をした結果、夜間、獣の姿のもとに走り回らねばならない魔法使いであった」と定義したあとで、しかし、実際ビグルヌであるとして捕えられた獣はただの鹿であったという。もっとも同書に収められた1895年11月10日の地方紙の記事によると、「ビグルヌ(ガニポットまたは人狼)がフーラに十二年ぶりに出現。獣は毎晩八時ごろ線路脇の森に現われるが、姿はさまぎまで、そこを通りかかる人を恐れさせる云々」とある。これももちろん変身が確認されたわけではない。

RCFの中で比較的「本格的」な伝承が報告されているのはピカルディー編上とノルマンディー編上だが、ピカルディー編では、沼地で転げ回って狼に変身する男のことが報告されている²⁹⁾。男は狼と化したあとで、羊小舎に忍びこんで羊を盗んできて、火の回りに集った「魔法使いや妖精や悪魔」たちとともにそれを焼いて食べるという。それだけなら、狼と化して、というところを除いてはよくありそうな話である。夜間、盗んだ羊を車座になって食べる羊泥棒たちが、神秘的な雰囲気自分たちを包んで身の安全をはかるだけのことかもしれない。ただし、そのあとに、狼狂から解放される話がつづいて、どうやら本物の狼狂譚らしくなる。ただ、狼の姿が見えなくなったあとで、宙に刀をふり回すと、それが人狼に傷をつけて、呪縛を解くというところに、本物の変身譚より仕掛けのある手品を見る思いがするのは、やはり近代的解釈が語りに入りこんでいるからだろう。

同書に報告されるもうひとつの話は、ずっと現実らしくなっているが、そこでは夜の森の中で

あとをつけてきた狼が、「だれかに命ぜられてきたか、あるいは人狼であろう」と推測されるだけで、首になった下男が怨みに思っただけで狼になって後をつけてきたのだというのは根拠のない臆測である。翌日、その下男に会ったら、棒でなぐられたように身体を歪めて歩いていた。それは前日、森の中で棒で叩いてやったせいだろうと言うのも、いささか強引すぎる。古来の人狼譚のように切った傷口が一致するというくらいの証拠がほしいところだが、近代社会では、それは難しい。

ノルマンディー編はこの集成の監修者である Cuisenier 教授の編纂になるが、ノルマンディーで Varous と呼ぶ garou についての伝承の報告は、他のいずれの巻にも増して充実している。ただし、他の巻のように聞き書きではなく、編者の文章でのまとめだから、どこまでが今日生きている伝承であるかは明確ではない。話はふたつあり、ひとつは犯罪者を告発する教会の破門宣告の結果、狼の毛皮をまとして七年間夜通し野原を走らなければならない罪人の話、これを解放するには眉間に傷をつけて、ちょうど三滴の血を流させねばならない。また、罪ほろぼしに狼になって走っているあいだにだれかに話しかけられると、またはじめから七年の贖罪をやりなおさなければならないなど、編者の報告は厳密で正確である。第二話は鎖や地獄の喧騒とともにあらわれる耳も尾もない巨大な白い獣の話で、どんな弾もあたらず（聖別した弾もあたらぬ）、熊手でつき刺すと、世にも美しい娘があらわれて息を引きとるという話、こちらは多分に文学化された書承からの影響が感じられる。

というのもフランス本国より伝承が純粋な形で残っているカナダでも、人狼 loup-garou として伝えられるものはもっと断片的で不正確なイメージでしかないからだ。よりまとまったものは大なり小なり前述のフレッシュェットやルメ (P. Lemay)、あるいはタシュ (J.Ch. Taché) などの書承説話からの逆輸入と思われる。それら書承文化圏から離れたオンタリオ州の僻村では、ルミューの採集にあるように、約半分は人魂と区別つかない定かならぬ妖怪であり、あるいは羊や牛の狂ったもので、人狼とみなされるものでも、その多くは牛や馬の眉間に傷をつけたら人間があらわれたという呪縛解除の物語である。

たとえばルミューの第六巻 (Les vieux m'ont conté, CFOF, 1975) に収められたアンメル村のオネジム・ジェリノーが語った話だと、道端に落ちていた毛皮のマフラーを捨てたところが馬が進まなくなった。そこでマフラーを捨てたら馬が走りだしたので、あれはまちがいに loup-garou だったという。またサドベリーのウルリック・ゴワイエットが語った話では、「人狼ってのは馬や御者をからかうやつさ、(これは lutin=小妖精であろう)……そんなときは車から下りて、垣根にナイフをつき刺せばいい。人狼はナイフに気をとられてるからそのあいだに逃げることだ (ナイフを好んでそのまわりを回ってたわむれるというのは人魂である)」となる。

現在の口承でかくも断片化し、変形している狼狂伝承はサンドのころでもすでに狼らしくない怪異一般をさすものに転化しはじめていたようだが、文学の世界で人狼と称するものの現われ

方を見ると、ある時点では完全な狼への変身の話があったものと思われる。しかし、現在の口碑にこだわらず、むしろ史的な民俗探索を行う歴史学者のドンタンヴィルの『フランス神話』H. Dontenville: La France mythologique, 1966 によってみても、かなり変わった話はあるが、狼の話はさして多くはない。

『フランス神話』の中で注目される話のひとつは人格分離の話で、galipote をつかまえて火にくべると、その家の女主人が苦しんで、自方が人狼であったことを白状する³⁰⁾。

また、ジェルヴェシウスの話では、狂気の錯乱が昂じて狼になる男の例が話られるが、愛する男のあとを小犬になってついてゆく女の話もあり、これについては昔話の『白猫』や『白い牝鹿』や、あるいはカゾットの幻想譚『恋する悪魔』なども思いだされる。そもそもドンタンヴィルは、garou の話を龍になる cocatrix の話や、鷲鳥になる話(ペドーク女王)、白鳥になった兄弟の話などと並べて論じている。

その文脈では白鳥のみならず、鳥や鹿や馬や牛や、その他さまざまなものに、魔法によって姿を変えられてしまう昔話の主人公たちの話が思いだされる。昔話では一般に伝説の怪異性、悪魔性が、驚異性におきかえられるが、変身こそ魔法昔話の主要テーマであると言ってよい³²⁾。

そして「狼狂」を本質的には人の獣への変身であるとして、ネブカドネザルの変身やキルケの魔術から説きおこすのがジャン・ボードンいらいの伝統でもあるのだが、そのボードンも、かかる変身を悪魔の業として「法的に」断罪しているのだから、それと昔話の変身とは同日には論じられない³³⁾。

ちなみにボードンは 1) 悪魔との契約、2) ある種の塗薬、3) 特定の川に浸る、または渡ることのどれかによって人間が獣に変わる。4) 傷を与えると人間に戻る、5) 手足を切ることで、同じく手足を切られた人間が人狼であったことがわかる。6) 変身は狼のほか、女は猫が多く、豚のこともある。7) 変身中は子供をとらえて食べる。8) いまでもアジアではよくその例があり、9) 魔法使によって変身させられこきつかわれるものも!その一種である、10) 医者は昔から狼狂を、狼になったと思ひこんで森を走り回る病気だと考えているが、それは誤りで、具体的に形が変わるものであること、ただし、人間の精神と理性までは変わらないことなどを述べている。

その後のポーヴェ・ド・ショーヴァンクールはほぼそれを踏襲しながらも、狼狂の「神罰」性を強調し、また、狼狂現象に「暗示」や「幻覚剤」の働きを認め、それが病気であることを否定していないのが注目される。

医学者であるニノーはさらに進んで、まず魔女たちが悪魔にもらった秘薬のおかげで鳥だの狼だのに変身したと称しているのは幻覚であると言ったあと、幻覚の原因として食物によって体液が乱され、悪夢を見ることと、(それを悪魔が忍びこむと言っている)、幻覚剤の塗抹、服用によるものを分け、その幻覚剤の調合を細かくのべている一方、後段では「生来の狼狂」として「メ

ランコリアとも呼ばれる病」をあげている³⁴⁾。

これらポーダンからニノーに至るまでの資料を読んであきらかになってくることは、当時の農村には「狼憑き」症状と、「人狼」迫害が頻繁に見られたらしいということであり、狼狂が伝説よりは、社会的・民俗学的、そして精神病理学的症例であったということだ。それと、狼狂のひとつとされる狼使いのばあいは異なるようにも思われるが、セビヨが言うように「森の中の人狼は、おおむね狼使いとして満足する³⁵⁾」のなら、それもまた、狼使いや人狼として村八分になったものが森に隠れて村人たちに報復を誓ったさいの形であったかもしれない。「人狼」は村八分になったものの森の生活の姿であるというのが阿部謹也氏の説である。これは狐筋などの差別形態に通ずる)。

民俗資料に出てくる楽師との関係では、音楽がとりわけ超自然の力や悪と結びつけられやすかったことの他に、日本と同じく、芝居や演芸に従事するものが村の共同体から疎外されて、差別されていた社会的事情もあるかもしれない。

狼狂についての資料の調査はまだ十分ではないのだが、この辺で筆者としては、わが国の民俗や文学との関係や比較をするための方向を設定しておきたい気がしきりにしてくる。それはたとそばサマーズの一行に、こうあるからだ。「人狼は中国や日本でも知られている。しかし日本では人狐が恐れと敬意とをかちえている³⁶⁾」

もちろん精神病としての were wolf, Lykanthropy が、わが国の狐憑きを思わせることは言うまでもない。広く獣憑き (Zoanthropy) としては狼でも狐でも同じで、東村・三好の報告する猫憑き (galeanthropy) の例や、高江洲らの分析におけるⅡ型「……になる (獣化)」の例は病状としての lycanthropy と合致する³⁷⁾。文学でもわれわれは中国種だが「山月記」を持って³⁸⁾いる。

しかし、同じ狐憑きでも社会民俗学的現象としてはわが国でははなはだ特異な展開を示している。クダ狐やオサキ狐といったものなら小松も言うように、座敷ワランなどと同じ家につく憑きものである³⁹⁾。しかし、石塚らの報告する「憑きもの筋」の家系や、犬神にとりつかれるとか、崇られるといった話になると一見したところ西欧の狼狂とははなはだしく異ってくるようにも思われる⁴⁰⁾。

しかしそこにおいても、セニョールが文学化して報告した例 (Marie la louve) によればフランスの農村でも狼筋と、対立家系をめぐって、憑く、憑かれる関係と陰湿な抗争や偏見の構造があるようである⁴¹⁾。

日本ではもうひとつ、狐といえばシャーマニズムの憑依信仰と、より後代の稲荷信仰、そして人間に化け、また人間をたぶらがす狐狸の類としての狐の俗信やフォークロアがある。それに対してヨーロッパでは狼が神として祀られた例はないようだし、狼のほうで人間に化けたりする話も聞かない。しかしそれはキリスト教西洋についてのみ言いうることで、ローマ以前の文化で

は、ローマのロムルスの子の狼や、北欧のフェンリル狼がある。ヨーロッパの文脈からははずれるがカナダの作家イヴ・テリオールはエスキモーにおける雪原の白い狼の信仰を報告している。とすると民間宗教のレベルでも西洋の狼と日本の狐は接点がまるでないわけでもなさそうである。そのあいだに、エジプトやアメリカインディアンのハイエナを入れるならなおさらかもしれない。

一方、残忍な人食い妖怪としては、日本では昔は天邪鬼が、そして近代では化猫が代表的である。しかし、「鍛冶屋の婆」型伝承では、婆自体は猫や大山猫であっても、話としては「千匹狼」、「狼梯子」の話である。ここに、インドや仏教説話系の牛や馬に転生する話を入れると、説話・民話のインド起源説も含めて、話が面倒になってくる。また飯縄使いはメルラン系列にも結びつくし、天邪鬼から発展してくる異類婚説話の中でも鶴女房的なものはメリュジーヌに結びつく。ただしそこでも馬娘婚姻譚、養蚕起源説話との接続の筋もあり、憑きものとの連関が指摘されているオンラサマ信仰などもかかわってくるとなると、かかる超自然の存在をめぐる精霊伝説の彼我の比較は、庶民文化全体を包括することになりかねない。

ただし、そこでもひとつだけたしかに言えることは、それがあくまで庶民文化にかかわるものであり、マリ・ド・フランスの伝えた領主の人狼症状は例外だということだ。それがまたリュカオン王やネブカドネザルから論ずるボーダン以降の十六・七世紀の論者の論と庶民の人狼伝承との乖離の原因でもあるにちがいない。

ボーダンらも実例としてとりあげたものはすべて貧しく無知な農民たちだった。彼らは、たとえばボゲのあげた例のように、森へ行って黒い服をきた「殿さま」に頼むと、狼になる薬と毛皮を与えられる。その「殿さま」をボゲは悪魔そのものであると断言してはばからないが、これはもしかしたらジル・ド・レとか青髭といった、もう少し具体的な人物だったかもしれない。そして、その「殿さま」の接吻を受けたものが、みな十歳から十二・三歳の少年であったことを見ると、それは少年愛の嗜好をもった者の変態行動だったのかもしれない。同じことは魔女たちのサバトの宴を司祭する男についても言えようが、一方の農民や少年の側からすれば、森へ行って、狼になって走り回るとか、うまい肉を食うといったことは、日頃できない禁じられた行為であったわけだし、一般に被抑圧民において、脱出の方向としての変身願望があることはふしぎではない。リュカオン王の説話において人肉食いが狼への変身の原因になるというのも、ひそかな願望と文化的な禁忌の相剋を象徴しているとも考えられる。ネブカドネザルの寓話も、それは同じであろう。それがキリスト教以後の西洋の庶民の生活の中では、教会の罰の面ばかりが強調されてきたことが、彼らの不幸であったかもしれない。

それでもニノの観察を見ると、筆者が医者であったこともあろうが、変身をもたらすものとして、阿片その他の幻覚剤や薬草によって製した練り薬の処方記が記されていて、こうなると、薬草の知識があって病気を治すものはみな魔女扱いにされた時代の雰囲気もうかがいあがってくる。

今風に言えば、村の若者たちが森に集まってマリファナを吸って騒げば人狼とされたろう。薬

草とりに森へ入った治療師が、薬草のありかを知られそうになったときには、自ら人狼のふりをして人を脅かして遠ざけもしただろう。教会や村の秩序からはみだしてしまっ、破門宣告や村八分の処置を受けたものは、事実、森へ逃げこんで、獣のような生活を強いられたろう。あらゆる社会的制約に抑えつけられて狂いだしそうになった血気さかんなものは、あるとき、わっと叫んで森へ駆けこんで、狼になったつもりで走り回ったかもしれない。人里離れた荒野で技を磨く楽師はいつか狼たちと親しくもなったろう。猟師の中には狼を手なづけて犬のかわりにしようとか、領主の犬に対抗しようというものもいただろう。そのどれもが人狼伝説を形成するのである。あるいは、そういった、欲望や知識や行動形態において共同体の規範を超えたものが、魔女などととも人間としての条件を剝奪されて共同体の外へ、すなわち夜の森へ放逐されたのである。

民間の伝承でも、メリュジーヌやガルガンチュアは支配階級の始祖伝説の変型である。メルランもまたアーサー王の宮廷の軍師であり占者である。ただ、それが公式の年代記に採用されなかったことと、メリュジーヌやメルランのばあいには悲劇的な最後をとげることが支配階級の論理と権利のみ主張する説話との差異を作りだしてきた。ガルガンチュアにもカーニヴァルの民衆想像力を認めることがあるが、大食にしろ、反教会的自由な言動にしろ、それはきわめて民衆的な願望ながら、ふつうなら民衆にはその実現が禁じられている願望であることを忘れてはならない。すなわちガルガンチュアは民衆の禁じられた願望を実現した英雄像だが、民衆もまた、その英雄像に対する保証として王権を与えているのである。同じことをただの村人が行えば、すなわち人狼として村を逐われる。パンタグリユエルによってうち敗られた「人狼」軍の話はそれを象徴している。

逐われて逃げこんだ森がはてしなく広く、動植物に富んでいれば、森の人、山人としてそのまま定着することもあるかもしれない。しかしフランスでは、文化度が高く、原始の森が少なかったから、森へ入った人狼も、ほどなくして発見されてとらえられ、法廷に引きだされた。ボードンらがくり返し言っていることのひとつに、変身は神の業でなく悪魔の技であるからには、外見の一時的な変貌で、内面は変わらないし、外見も時がたてばもとに戻るといふ考えがある。これはおそらく、フランスの「森」と、そこにおける「狼」の消滅とに軌を一にしているのであろう。「森」が神秘的な力をふるいつづけているところでは、人狼はもっと超自然的妖怪の様相をとっていて、むしろ幽霊と同一視されている。フランス語圏でもカナダでは、ことばとしての概念の混乱を除けば、フランス本国より、超自然性は強い。サマーズは、were wolf の語源をたずねて vkodrak すなわち vampire であるとしている。吸血鬼、すなわち迷いだした死者の魂であるなら、変身呪縛が解ければ永遠の死の休らぎに赴くであろう。昔話の変身譚がおおむね呪縛が解けて幸せな結末を迎えるのに対し、伝説中の代表的変身譚としての人狼説話では、結末はむしろ不幸なものが多いのも、人狼の本質が死であるなら納得がゆく。その点でもマリ・ド・フランスの話は人狼的ではないということになる。フィリップ・メナールは、人狼がもとの騎士に

戻るところを寝室での眠りの中に設定したことを讀え、目覚めればすべては悪夢であったと思えるであろうと言っている⁴²⁾。そのような文脈ではこれはたんに裏切られた夫の不幸の物語である。レオ・シュピッターは物語の終りで、騎士が狼狂の性癖から脱却したのかどうか描かれていないことに不満をもらしているが⁴³⁾、最後に、鼻を食いちぎられた妻が国から逐われ、その子孫は代々鼻のない人たちだったというところを見れば、追放状態が、夫と妻において交替しているだけで、妻のほうが被追放民として差別されつづけたこと、ある種の人狼とされたことを示している⁴⁴⁾と読めないわけではない。

なぜなら「人狼」となるには狼になる必要はないからだ。ダニエル・ラコートの採集したノルマンディの伝承では、いわゆる「白い女」型の幽霊が、射ち殺してみると狼の皮をかぶっていたというだけで *varou* であったとされている。(La Dame blanche, Luneau Ascot, 1980.)

女、それも若くて美しい女のばあいには、色好みが昂じて、「人狼」になるとされるケースが多く、夜間、外を走り回ること、日本語の「夜這い」に似た感覚が与えられているからだ、であるなら、ビスクラヴレの奥方も、情夫と通じた廉で「人狼」とされてもおかしくはない。いづれにしても社会的条件によって課された規範を超えて「自由」な行為をするときに「人狼」の罰が与えられるわけで、貧しい農民なら領主への反逆(狼使い)や、獣肉の飽食、(生肉食い、人肉食い)、支配階級の女なら多淫が、「人狼」の刻印づけのモチーフになる。したがって、眉間に傷をつけて呪縛を解くというも、その後長く傷が人目にさらされることを考えれば、これはまさに「狼狂」性癖に対する社会的制裁としての刻印づけであり、刻印されて解放されるのではなく、刻印されてはじめて人狼の履歴があきらかになるのだ。であれば、ビスクラヴレの奥方の鼻欠けが、むしろ真の人狼制裁にあたると言っても、それほど不当ではない。

体制的権力はつねに規範外への逸脱を処罰し、排除してきた。そうやって排除されるものたちの話が年代記に記されるはずはない。ただ庶民の記憶の中には、そうやって不条理に抹殺された同朋の思い出が謎の超自然的恐怖とともに残されることとなる。教会はそれをもっともらしく解釈して、我田引水をはかる。しかし近代文明の歴史は、そうやって排除され差別されてきたものたちの影に脅かされつづける。夜の闇の中を走るものの気配⁴⁵⁾。

注

- 1) 《les historiettes contés tracent des scènes qui ont leur constance, et qui ne figurent chez aucun des choniqueurs gargantuins du XVIIe siècle, y compris Rabelais,》 Henri Dontenville : La France mythologique, Tchou, 1966, P, 284
- 2) たとえばパプフィギエールの悪魔の話などは民間伝承そのままである。(A T1030) また「人狼」の軍隊の話もある。
- 3) 民間伝承ではメリュージュはむしろ建設妖精(Fée batisseuse)と考えられる。メリュージュが一夜にして城を作ったといった話、彼女が前掛に築城用の石を入れて空を飛んでゆく途中、こぼれ落ちた石が山になったといった伝承は数多い。

- もうひとつ、彼女の生んだ子がいずれも三つ目、大耳、獅子瓜などの異形であることもただの異類婚説話とは異っている。ある意味ではメリュジーヌもガルガンチュアに匹敵する女巨人と見られる。(cf-Dontenville, *Histoire et géographie mythiques de la France*, Maisonneuve. 1973, P. 182)
- 4) Claude Lecouteux : *Mélines et le chevalier au cygne*, Payot, 1982
 - 5) アンドレ・ブルトンの『秘法十七番』他。
 - 6) ガルガンチュアは大食・美食の象徴とも考えられる。各国の巨人伝説と異なるのが、この美食趣味である。メリュジーヌは文学ではいわゆる「恋する悪魔」の原型とされる。それに対してメルランは女にだまされる亭主の話とも考えられる。グルメ、ファンム・ファタル、コキュというフランス文化の三大基調がここにも見てとれる。一方、ガルガンチュアは昼の世界の理想像であり、メルランは地下の闇にひそむ抑圧されたものの姿である。メリュジーヌはその両世界を往復する。
 - 7) Saintyves : *En marge de la légende dorée*, Nourry, 1930
 - 8) 個々の異常現象は世間嘲として記録されるべきであろうが、超自然にかかわるものは「伝説」に分類される傾向がある。
 - 9) 古代の神仙伝説に対して、その後の歴史上の人物の伝説化、それも公式の年代記ではなく民間の偽典における伝承では、ドン・ファンやファウストそしてナポレオン伝説などがある。
 - 10) Mérimée : *Les âmes de purgatoire*, 1834
 // : Lokis, 1872
 Balzac : *L'élixir de longue vie*, 1830
 Nerval : *Chansons et légendes du Valois*, 1842
 - 11) Souvestre : *Le foyer breton*, 1844
 Sand : *Légendes rustiques*, 1858
 - 12) 人狼本来の話としてはペトロニウスの『サチリコン』がもっとも古いだろう。トリマルキオの宴でニケロスが語るある兵士の話、墓場で衣を脱いで狼になる。農家の羊を襲ったところを槍で刺される。そのあとで、同じ傷でベッドに寝ているところを発見される。
 ギリシャ神話のリュカオンの話は、リュカイア祭の人肉食儀礼の転化であり、また神話体系内での変身はさして珍しいものではない。ただし Smith, K. F : *The werewolf*, P. M. L. A. 1894 は、これを人狼伝説の祖としている。
 - 13) 《Il y a donc nette coupure pour l'auteur entre son conte et la tradition, Bisclavret n'est pas une histoire de loup-garou et ce n'est pas pour le bisclavret, pour le loup-garou, que Marie de France a de la sympathie, mais pour l'homme Bisclavret》, Edgard Sienaert : *Les Lais de Marie de France*, Champion, 1984, p. 88
 - 14) 《Les écrivains qui ont parlé de ces métamorphoses ont assez rarement dit les causes qui les motivaient》, Sébillot : *Folklore de France*, t. I, p.55
 - 15) 天人女房の研究は広くなされているが、鶴女房をめぐる比較論で、小沢俊夫氏がヨーロッパでは人間が魔法で異類に化していて、異界から配偶者の来る日本型と異なると言っている（『日本の異類婚姻譚の分析』昔話と動物、三弥井書店、S57）ことに疑義を呈しておきたい。白鳥乙女型は国際的な説話である。
 - 16) サマーズは、フランスの人狼譚として、このほかに『ロキス』とモーパッサンの「狼」をあげている。Montagu Summers : *The werewolf*, Kegan Paul 1933, p.216-9
 しかし『ロキス』をあげるなら、レニエの「ヌアートル氏とフェルランド夫人の死」もあげたい。怪物による夫人殺害と、現場で受けた傷とヌアートル氏の致命傷の一致等で、これは立派に、狼の出てこない人狼の話だ。
 それに対してモーパッサンの話は「まるで人間のように考える」狼ではあるが、人狼とは明示されな

い。

サマーズ以後のものではセニョールの「ガルー(gáloup)」と「牝狼のマリー (Marie la louve)」がある。「ガルー」は狼を追いつめる男と狼が同一人物だったという話、「牝狼マリー」は、狼使いによって特別な能力を与えられた娘の話、Durand-Tullou はこの話を meneur de loups の中に入れていながら (Du chien au loup-garou, Maisonneuve, 1961) マリーのケースは狼使いのそれではない。ただし後述するように狼の呪いのついた人間、家柄として村八分になる話としては興味深い。

- 17) この伝承は西部と中央部に多く、東部と北部にはほとんど伝わっていない (Sébillot: op cit. I-284)
- 18) 夢遊状態で動物の行動をとり、動物になったつもりになる話はエルクマン=シャトリアンの偏執的テーマのひとつである。「長老の時計」は猫になる男の話だ。
 ≪il appartenait malheureusement à la famille des chats... race terrible, qui tue pour le plaisir de tuer!≫
- 19) 破門宣告の前に、目撃者召喚の monitoire が公告される。Sébillot p. 55, monitoire は quérémonie と呼ばれる。RCF. Normandie I. 1989 p. 54
- 20) Taché の伝える話では「溺死者の魂」の中で、「冷たい火」と溺死者がともに loups-garous に変わったと言う。(Forestiers et voyageurs, Fides, 1946, p. 124)
- 21) Sébillot, op. cit. p. 304 他
- 22) 「鍛冶屋の婆」日本伝説大系, みずうみ書房, 昭60, 第2巻196-201頁他。
- 23) Bodin, Les Démonomanie des Sorciers 1580, p.220~221
- 24) 現代精神医学大系, 中山書店, 第四巻A
 「古代ギリシャ・ローマの精神症状」。ただし今日では夢遊病型と妄想型の Démonopathie が多く、変身妄想としての獣憑きは稀であろう。
- 25) Récits et Contes populaires (以後R.C.F. と略記) シリーズのオーベルヌ編上では cabrette (風笛の一種) で狼を退散させた話 (p. 153-4) が同ドフィネー編上では、同種の話 (p. 123-4) の他にヴァイオリンで狼たちを魅惑した話がある。一般に音楽は魔力のあるものとされていて、名曲やすぐれた楽器を手に入れるには悪魔との契約が必要だという俗信は広く語られている。(幻想譚では「トビアス・ガルネリウス」や「烏のレクリエム」「タイタンのオルガン」など) そして、一方、滑稽な揶揄の対象とならない悪魔の姿の中で、もっとも普遍的なものは狼である。
- 26) Cl. Seignole: Le Folklore de Languedoc p. 266. 他
- 27) R.C.F. ニヴェルネ編, 1589
- 28) 同下巻には meneur de loups と題した話があるが、これも人狼ではなく、ただの狼に子供が食べられた話である。もっともコルヌーによると人食い狼は、罪を犯したまま死んだ魂がとりついた狼であると言う。Jakez Cornou: Les loups en Bretagne, Sked. 1983 p. 18-19
 セニョールの『ソローニユ民俗志』1977. でも, Dubois の Sologne d'antan, 1932からの引用として, 「白い布をかぶって四つ足で歩き回って農家の人たちを恐慌に陥し入れた悪いやつら」すなわち loups-garous という表現がされる。
- 29) 水をくぐり抜けると変身するというモチーフは Bodin: Démonomanie des Sorciers, 1580 や Chauvincourt: Discours de la lycanthropie, 1599 にもある。もっともこれはいずれもプリニウスからの引用である。
 ≪au bord d'un estang se despoillant pendoit ses vestements a un chesne prochain de la & tout nud trematant, l'estâg, ou fleuve, se retiroit au desert en forme de loup≫. p. 113, Chauvincourt.
- 30) (未見) Gervase of Tilbury: Otia imperialia, 1212 (Dontenville による)。
- 31) Smith (op. cit) が紹介している話 (Both-Hendriklen の採集による) で, フランスの二・三の僻村

でのみ語られている話に、人間のうちには生まれながらにして、狼の分身を持ったものがいて、人間が眠っているとき、放心しているときに、魂が狼のほうに移行するというものがある。いずれにしても論者は、人格変換や分身、二重人格といった面から狼狂を見ている。

32) トンプソンの Motif Index の D. Magic の項のうち D0-D699 は Transformation である。そのうち人間から動物へは、D100-D199、人狼は D113. 1. 1。

33) 人間が動物になるばあいにも、昔話におけるように魔法をかけられるばあいと、超自然的な力を援用するにしても自由意志によるものとが区別されよう。人狼のばあいは、「狼使い」系統のものは自ら進んで狼の仲間になるが、教会の *monitoire* によるものは神罰であって、好んで狼になるわけではない。ポーダンは主として悪魔と自主的に契約を交わしたものがどのようにして狼になるかを論じており、神罰の観念はない。その後の教会社会の伝承では *monitoire* だけではなく、神父が不犯の誓いを破って子を生んだばあい、(七代)、七年ミサを怠ったばあい、など、罰として狼になるとされる。

昔話では、魔法による変身以外に、動物の毛皮による変装がよく出てくる。こちらはほとんど自由意志だが、ペローの「ろば皮」などの場合、父子相姦という「獣性による」汚れの象徴とも考えられる。王女が父の許を逃げるだけなら必ずしもろばの皮を身にまとう必要はない。一般に、高貴な配偶者と結ばれるための通過儀礼として、灰かぶり、かいせん病み、獣皮などを装って、汚れと試練を経るモチーフがある。

34) ポーダンは具体的には Gilles Garnier (1573) と Michel Verdun (1521) の裁判を引きあいにしている。Prieur も具体例としては Michel Verdun 事件だけである。(Dialogue de la lycanthropie, 1596) サマーズはフランスの例として、1521年の Michel Verdun の事件をあげ、ついで、もっとも有名なものとして Gilles Garnier 事件をあげ、三番目に Gandillon 一家事件 (1584) をあげているが、これは Boguet が Discours des Sorciers, 1590 で主として扱った事件である。(pp. 119-121) そのあと、サマーズは、やはりボゲの例として、Clauda Janprost の例をあげ、ついで、1598年パリで火刑になったシャロンの仕立屋の件、同年アンジエで審理された Jacques Roulet の件を紹介しているが、これは、De Lancre: L'incrédulité et mécréance du sortilège, 1622 (未見) からの紹介である。つぎの Jean Grenier の件 (1603) (司祭の息子の件) も同じ著者による Tableau de l'Inconstance des mauvais anges et Démons 1612, p. 257-264 から引いている。Nynauld: De la lycanthropie, 1615には新しい例はない。

35) op. cit. I-284

36) op. cif. p. 21

37) 東村輝彦・三好新之祐、「猫憑きの一例」精神医学21, 371-377, 1979, 高江洲義英他、「動物憑依についての民俗精神医学的考察」精神経誌, 78-8, 568, 1976

Malebranche は Recherche de la vérité の中で《Un homme, par un effort déréglé de son imagination, tombe dans cette folie, qu'il croit devenir loup toutes les nuits》. p.208 と言い、人間が自ら狼とか牛であると思うには un si grand dérèglement d'imagination が必要だとしている。

あるいはまた、狼になったと思ひこむことは un bouleversement de cerveau を必要とするとも言いかえているが、その程度は、サバトの宴に行ったと思ひ、目覚めたあとでもそういった夜の夢を白昼起こったことと区別できないような人間のばあいとは軌を一にできないとしている。

38) 「狼疾記」などを見ると中島敦自身、いわゆる「狼狂」傾向を持っていたようにも思われる。が、そのボレル的狼狂傾向は梶井基次郎などのほうがより強烈だったかもしれない。闇の中を棒一本たよりに疾駆する男の話に羨望をこめて語る彼にはたしかに、あまりまでもでないところがある。

一方、『紫苑物語』は寓話であって、中勘助の『犬』もその点は同じであろう。むしろ百閒の「件」がまさに「人牛」説話の応用として人狼に類するものと考えられる。

- 39) 小松和彦『憑靈信仰論』現代ジャーナリズム出版会1982。ただし座敷ワランはシャーマニズムとは関係がない。オンラサマのほうは獣人交差神話との関係から、動物憑依の文脈で狐や狼と通ずるが、憑依ではない。
- 40) 石塚尊俊『日本の憑きもの』、未来社1972、石塚のまとめた日本の憑きものは、オサキ、クダ、ゲドウ、イツナ、人狐、トウビヨウ、犬神、ヤコその他であるが、まさに座敷ワランのように、その一般には姿の見えない小妖精が家に住みついて富貴をもたらすばあい、また「犬神という外道の神を持ちて、少しの恨あれば犬神を心に憑くる」(『本朝故事因縁集』、石塚より)ように、狐使い、犬神使いで他人他家に害をなすばあい、そして、逆にそれらにとり憑かれてヒステリー性反応をおこすばあいの三種とも村の中の家と家の関係であり、富家や他所者に対するねたみ・排斥・差別のための「記号」と見られる。
- 村の中で発狂するものがあると、その家と抗争関係にある家の呪いのせい(狐を憑けられる)であると判断される。
- 「日本の精神病者に狐、犬神、蛇、狸、猫、猿などの動物憑依の症例の多いこと」が指摘される。(『現代精神医学大系』25巻、84p.)
- また明治初期までは「精神病者自ら、あるいは周囲の人々が精神病的な例外状態を狐憑きとする傾向が大きかった」(同上、80p.)
- 村の中の家同士の抗争、反目、嫉視、あるいは嫁と姑の関係などが、農村の精神病の原因として少なくなかった。
- そこにはさらに修験道系や、その他民間信仰のシャーマニズム的憑靈信仰があり、人や動物や死者の霊がとり憑くことが認められていた文化的精神土壌があった。
- かくて、閉鎖的かつシャーマニズム的農村地帯で差別的、排地的社会構造が、特定の人間に特別な緊張状態を招き、狐憑きに関する迷信と伝承が、暗的に働いて、憑依症状と社会的な憑きもの事件をひきおこしてきたとみられる。そこでは現実の狐、猫、犬、蛇の生態や、動物フォークロア、さらには三輪山説話などの神話伝説との接続はきわめて薄いものと思われる。
- それに対して、西欧の人狼は、まず狼にかかわるばあいは、狼の毛皮を用いるといったように、具体的な狼との接続がある一方、狼使いと人狼とのあいだに狐憑きと狐使いの関係はないことが注目される。しかし、異類婚説話との接続と、もう一方の極での村落共同体内での差別の構造、そして、獣憑き症例としての精神病症状の問題では、彼我に共通する部分も少なくはなさそうである。
- 41) Cl. Seignole: Marie la louve, 1949. には、狼への変身といった超自然的要素は現われない。ただ、いわれなく狼の申し子であると噂されるようになったマリーがことごとく村の中で迫害され、一方マリーにとり憑かれたと信じこんだ側が夜中に人狼が家のまわりをうろついているように想像して奮えたりする話で、作者が民俗学者として出発した人だけに民俗資料として信用できるとともに、わが国の憑きもの筋の事例との類似が注目される。
- 42) Ph. Ménard: Les Lais de Marie de France, PUF, 1979, p. 177
- 43) L. Spitzer: Marie de France, Zeitschrift für romanische Philologie, 50, 1930, p. 34
- 44) この話は M. Hérubel: Contes populaires de toutes les Normand, Ouest France, 1978 にもあるから、早い時期に書承化されたものであろう。
- 45) 最後に若干のまとめをしておくと、「人狼、狼狂」には、症例や判例としての「事実」と、世間断や神話的な「伝承」とがあり、「文学」はその双方から題材を得ているが、『サチリコン』、「ビスクラヴレ」、『狼使い(デュマ)』、『狼のフーゴ』、『牝狼マリー』はそれぞれに凶悪犯、姦通、狼使い、狼憑き、狼筋のテーマをとり扱って、さまざまであって、「人狼」という名で漠然とさし示しているものがかくに多岐にわたるかがあきらかであると言わざるをえない。そしてそれら多様な現象に即したもののより『ロキス』や、「ヌアートル氏とフェルランド夫人の死」や、『山月記』のような、狼からはずれながら

抽象化されていった物語に、より明瞭に狼狂的人間性の研究を見ることができると言えるだろう。ただし、それら変身、獣人譚の究極としてカフカの作品を持ってくることができるかどうかという問題と、(スミスは『ジキルとハイド』を人狼譚の延長に据える)、民俗学、人類学の視点から「憑きもの」症状としてこれを見るかどうか、今後の課題だろう。

- 46) Merlin についてのフランスの文献では Wace の Roman de Brut (1155) が古い、これは Geoffrey of Monmouth の翻訳とみなされている。また、「散文メルラン」については作者に疑義があるともされる。口承伝承ではケルト世界以来、英仏に同時に存在してきたと見てよいが、後代のフランスの庶民はそれを自国の独自の伝承とみなしていった。